



@pomu_iyashi

〈二年〉

あの青を目指して / 小金丸 愛友

〈三年〉

デスしないデスゲーム / 梶田 光汰朗

大人になったことを忘れられる、秘密の場所があるんだと林藤は僕の顔を覗き込んで嬉しそうに言った。

彼女の言うことは大抵面倒くさくて手間がかかることが多いから、秘密の場所に行こうという誘いはいつものように断ろうとしていた。でも折れるのは大抵僕の方で、ため息をつきながらいいよと言うと彼女は嬉しそうにありがとうと言って笑うのだった。

「秘密の場所ってどこなの？」

九月下旬、僕と林藤は学校が終わった後バスに揺られていた。残暑と

いうのを具体化したような暑さが僕らを包んでいた。でもそれは周りの人も同じなようで、ハンカチで汗を拭う人や手持ち扇風機を顔に当てている人を数えきれないほど見た。

バスの一番後ろに座り、流れる景色を眺めている林藤に訊ねる。

「秘密って言うてるのに、伝えたら

秘密じゃなくなるじゃん」

「じゃあせめてどこに行くかは教えてよ」

景色から目を離し、彼女は僕の間を見た。彼女が何かものを言う時はまっすぐに目を見る癖がある。それ

を僕は知っているから、何かあるんだろうなと身構える。

「青が似合う場所」

その言葉が小説の一説に出てきそうな言葉で、僕は思わず笑ってしまった。なんで笑うの、と林藤はムツとした表情をしていたけれど、次第に彼女もおかしくなったのか笑っていた。

バスの中に人は僕ら二人だけだった。学校付近は降り降りする人が居たけれど、山道に入ったところから乗車する人は居なかった。

ふと景色を眺める林藤の横顔に目をやった。彼女の横顔は綺麗だと

思うけれど、それを口には出さない。きつと彼女は嘘だと言つて笑うことを知っているからだ。

山道を抜けたのか所々に家が見え、車通りも多くなつた。運転手が次の停車場を告げた時、林藤が下車ボタンを押す。その音が妙に車内に響いて少しだけ緊張する。

「ここで降りるの？」

家があるとはいえ、何かするには何もなかった。彼女に訊ねるとそうだよと当たり前のように言われ、僕は少し戸惑う。その間にバスは停留所に着いたようで停車して前方のドアが開く。

「日向ひなたが先に出ないと降りれないから」

そう言つて林藤は鞆を持つて距離を詰めてきた。それに妙に緊張して僕は慌てて鞆を持ち、四二〇円を払つて外に出る。アスファルトから湧き上がる暑さが僕を再び包み込み、この猛暑の中歩くのかと思うと無意識のため息が出た。振り返ると彼女もバスから降りていて、定期を鞆の中に仕舞つていた。

「目的地はすぐそこだから」

歩こう、と言つて前方を指差し、林藤は歩き出す。彼女に続いて僕も歩き出す。

住宅街の道沿いを真っ直ぐ歩いて数メートル歩いたところで、潮の香りがすることに気が付いた。遠くからは漣の音が聞こえ、一歩ずつ歩みを進める度に潮の香りが強くなつていく。

「ここだよ」

住宅街が広がる横で、青色の海が広がっていた。それは田舎の特権かもしれない、と思い田舎育ちを初めて誇らしく思った。

「でも私がいつも来てる場所はここじゃないの」

コンクリートで作られた階段を降り、浜辺に立つ。足が砂に取られ

る感覚が懐かしくて、小さい頃に家族で行った海を思い出させた。

昼ということもあってか人は見当たらず、浜辺には僕らの足跡しか残っていなかった。それがまた新鮮だった。

海に見惚れていると、遠くに棧橋が見えることに気が付いた。彼女は鞆を浜辺に置いて歩き出す。僕も彼女に倣って鞆を置いて棧橋に足を掛け、歩き出す。

「秘密の場所はここだよ」

棧橋の上をしばらく歩いた時、藤が口を開いた。その声は左右から聞こえる小さな漣のように包み込

むように聞こえて心地よかった。

「青い春って書いて青春って読むのは、きつと海が青いからだと思ってるの」

言葉を嘔み締めるように言う藤に、僕は黙って耳を傾ける。

「青は挑戦する色だって誰かが言っていた。それは強ち間違いないけど、本当だと思う。だからってどう言葉に表したらいいか分からないけど、この青さを知ってる私達ならどんなことも向き合えると思うの」

確かにこの空の青さと海の青さはここでしか見られないと思う。よ

く浜辺から水平線を見ることは出来るけれど、それに近付くことは不可能だった。でもここは手に届かない場所に少しだけ近づくことが出来る。海と空が何か直接的に関わることはないけれど、それでも応援していることは確かで、それが活力になる気がする。

「断らなくてよかったでしょ」

そう言って微笑んだ彼女の横顔はやはり綺麗だと思った。それを口に出さない代わりに、毎回この言葉を彼女に伝える。

「うん、よかった。教えてくれてありがとう」

この言葉を伝えると彼女が笑顔になることを知っている。それに恋愛感情は含まれていないけれど、僕はきつと今の関係性のままでいいのだと思う。

「この橋、もう少し奥まで続いているから行って見ようよ」

日向、と呼び掛けて林藤が髪を靡かせて歩く姿を眺めながら、僕は彼女のあとに続いた。

どうして人は先が見えない場所に行こうとするのか。

その先に何があるかわからないのに、先に行こうとする人たちは僕にはそれがまったく理解できない。

ある日、デスゲームが開始した。内容は簡単。

両隣にある水に触れることなく橋を渡り切れというもの。橋の幅は1メートルほど。頑丈にできており、揺れることはない。

今いる島にいれば食料は尽きることはないため死ぬことはない。

ゲームの内容はこれだけで。クリアすれば一千万とのこと。

当然僕以外の参加者はみんな喜び、スタートと同時に、順番に橋を渡り始めた。

そして、島には僕と一人の少女だけ。

何とも不思議な少女で、僕はいくら話しかけて返事をしてくれない。

だけど、そんなある日少女の方から僕に声をかけてくれた。

「お兄さんはどうして橋を渡らなかつたの？」

何とも透き通った声で、一瞬耳だけが興奮してしまった。

「僕はお金に興味ない……というのうそだけど、元の生活に未練は

ないからね。だったら、食べ物以外何もないこの島で、余生を過ごそうかと思つてね」

話して思いつくのは就活の日々。いくら履歴書を書いても面接ま

で進めない不運。いつそのことニートになって親のすねをかじって生活しようと思つたこともある。

「私も」

「？」

「私も元の生活が嫌だつたからこの島に残つた。いくら生きても勉強の日々。親は頭のいい学校に行かせることしか思っていない。私のことなんて見ていない。だから残つた。」

お金なんてあったところで人生が
変わるわけじゃない」

この子も相当苦勞していたんだ、
と共感してしまう。

僕とこの子はどこか似ている。

元の生活に興味がなく戻るとも
りもない。

もしかしたらほかの参加者たち
も似たような理由でデスゲームに
参加させられたのかもしれない。

でも彼らにとってその悩みはお
金が入れば解決できるもの。

だとしたら、彼らと僕は生きる
世界がそもそも違う。こういうデス
ゲームには友情が芽生えたりする

のかもしれないけど、生きる世界が
違うんじゃないことはあり得な
い。

「でもよかったかな。お兄さんが普
通の人で」

「どういうこと？」

「もしこの数日で手でも出して来
たら、私はすぐに水につかって死ん
でたからね」

「なかなかだね」

これは僕としてもうれしいかも
しれない。

こんなところで一人になったら、
寂しさに死んでしまうかもしれない。
い。

この子に欲情しなかったわけで
はないけど、こういう時に僕の真面
目は生きてくれてありがたいか
な。

「お兄さん、これからどうするの？」

「この島で生活しようかかって思
ってる。元の生活に戻っても意味な
いし」

「……だったら、私たちがアダムと
イブにならない？　そして新しい
世界を作るの！」

「あはは、そんな冗談他で言ったら
いけないよ！」

「本気だよ」

その言葉にドキッとなってしま

う。

確かに彼女の目は本気目。だってら年上である僕も覚悟を決めなければいけない。

「後悔しても知らないよ」

「自由になったんだから後悔もクソもないよ」

「……確かに」